



## 第9回日本集団災害医学会報告

札幌医科大学附属病院高度救命救急センター  
浅井 康 文  
伊 藤 靖

### はじめに

2004年2月12～14日にわたり、札幌コンベンションセンターで第9回日本集団災害医学会を開催した。この学会は、北海道医師会（飯塚弘志会長）と国際協力機構（JICA：緒方貞子理事長）の御後援をいただいたので、報告する。

### 日本集団災害医学会とは

日本集団災害医学会は1995年1月17日に発生した、阪神・淡路大震災の翌年1996年1月26日に第1回日本集団災害医療研究会として、当時の千里救命救急センター所長・太田宗夫先生を会長として発足した。そして第5回の国立病院東京災害医療センターの辺見 弘院長から日本集団災害医学会となった。実はこの学会は、1993年7月12日の230名の死者を出した北海道南西沖地震の調査に、当時の国際緊急援助隊（JMTDR）の仲間を中心として奥尻島へ被害調査に行った時、奥尻の民宿で日本にも災害医学を話し合う研究会を作ろうと皆で話しあったことが、下地になっており、私の災害医療に対するターニングポイントとなった。今回は第3回の金子正光名誉教授から6年ぶりの札幌での学会であった。

### 学会プログラム

学会の2日前より、北海道JICAセンター（札幌）で日本集団災害医学会セミナー（二宮宣文委員長）が開催され、80名余の参加者が、トリアージ、集団災害や瓦礫の下の医療について、実技を含む災害の研修を受け、終了証書を受けた。このセミナーの最終目標は、①災害医療コーディネーターとして災害救護活動の指揮を可能にする、②

災害発生時の迅速で効果的な災害医療対応を可能にする、③災害救護計画の立案や災害救護マニュアルの作成を可能にする、④災害医学教育および災害救護訓練の企画を可能にする、である。

本学会は2日間にわたって札幌コンベンションセンターの2会場で行われた。今回のテーマは「NBC（Nuclear, Biological, Chemical）災害に対する連携」であった。それにあわせて特別講演に、3人のアメリカよりの講演者をお招きした。マサチューセッツ州立大学医学部のAghababian教授は主に「放射線・核災害」について（図1）、ニューヨーク市立消防局のメディカルコントロールのトップにいるGlenn Asaeda先生は2001年9月11日の貿易センタービルのテロ事件の現場におられた教訓とその後の体制をお話していただいた（図2）。エール大学に移動したばかりのArnold先生は、得意のテロリズムについて、定義を含めて世界のテロの現状を御講演いただいた（図3）。他に日本から2人の方の特別講演があり、1人は日本赤十字国際看護大学教授の喜多悦子先生でした。喜多先生は現国際協力機構



図1：Aghababian教授の講演

(JICA)の緒方貞子理事長が国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)におられた時の片腕と言われた方で、2003年栄えある「エイボン女性大賞」(世界平和、地球温暖化防止など、これからの時代を的確に捉え、社会のために有意義な活動をしている女性)を受賞されており、得意の「難民医療から、避難民保健へ」を、御自分の生き方を交えながら「いいことだと思っても、現地の人はどう思っているかが大切である」と講演していただきました(図4)。もう1人は元防衛庁陸上幕僚監部・衛生部長で、現在、陸将補で自衛隊札幌病院の古家隆司院長に「自衛隊の災害における役割」を講演していただきました。古家先生は1991年の自衛隊の大規模な救急医療支援訓練(ビッグレスキュー)の中心的役割をされ、1993年・自衛隊札幌病院におられた時、北海道南西沖地震時に日本で初めて陸上自衛隊医療団を結成し、団長として奥尻島にヘリコプターで出動され、新しい自衛隊の災害医療の道を開かれました(図5)。冬季間

に北海道南西沖地震が発生したらどのようなことが予想されるかを、シミュレーションしていただきました。冬に大地震や津波が発生した場合、降雪、低温などで被害増大や支援拠点確保の困難性、救出や搬送の遅れが考えられ、搬送などにおける連絡体系や調整を迅速に行うために、現場進出や搬送計画が重要であると述べられた。その他、ランチョンセミナーは2つあり、米国のFEMA(連邦緊急管理庁)のBosner先生が、自然でもテロでも起こりうる感染症の勃発は予防できないが、適切な訓練によって被害を減少できると述べた。昨年12月26日・イラン・バム市での地震に医療活動をされたHuMA(NPOの災害人道医療支援会)理事長の鶴飼 卓先生と、国際協力機構緊急援助隊事務局の太田孝治先生は、イラン地震(死者推定約3万人)の緊急報告を行った。

2つのシンポジウムの1つは、各組織の連携をテーマに、災害対応における他組織とのCollaboration IIを行った。他は災害における現実的な対



図2：Asaeda先生の講演



図4：喜多教授の講演



図3：Arnold先生の講演



図5：古家院長の講演

応の諸問題を取り上げた。

今回のもう一つの大きなテーマは、冬期間・積雪時の災害がテーマで、化学災害の時の実体験セミナーを、自衛隊北部方面隊、北海道警察、札幌市消防、医師団と合同屋外訓練展示を行う予定でしたが、2月の自衛隊北部方面隊のイラク派遣と重なり、残念ながら自衛隊の御協力は得られませんでした。

サリンがまかれたとの想定で模擬患者にて、札幌市消防の特殊災害救助隊が出て、除染、搬送等のデモンストレーションを行いました。ジャンプ競技で使用する大型スクリーンを使用して、札幌市消防局、大阪府立病院の吉岡敏治先生と順天堂大学医学部の奥村徹講師に、解説していただきました(図6)。Arnold先生からは、久留米での学会のセミナーより化学災害対策のレベルが向上していると評価をいただきました。

今回は90題余にのぼるたくさんの演題をいただきました。これをシンポジウム2つ、ワークショップI・「過去1年の災害事例の検証」、ワークショップII・「過去の災害事例の検証」、ワークショップ：避難者訓練、パネルディスカッション・災害教育、フリーディスカッション・災害評価の方向性、および一般演題にまとめました。過去1年間の災害事例の検証では、平成15年度十勝沖地震についても報告されました。2003年8月9日、台風10号が北海道日高地方に豪雨をもたらし、河川の決壊等による被害が生じて死者6名を出した。また同9月26日、十勝沖にてマグニチュード8.0の地震が発生し、北海道日高地方、十勝地方、釧路



図6：化学災害の訓練

地方に大きな被害をもたらした。以上2つの災害に関して、日本集団災害医学会では現地調査を行った。平成15年十勝沖地震は、最終的に行方不明者2名、重症70名、軽症779名、全壊家屋104棟、半壊345棟、病院被災2カ所(青森県)、水道断裂16,006と北海道庁から報告されている。その他宮城県北部連続地震、熊本県水俣の集中豪雨災害、福岡市の集団熱中症などの報告があった。

その他、恒例の災害拠点病院連絡会議が行われ、行政に対する注文が出された。災害に関する最新の機器も展示され、好評であった。

## おわりに

2003年は、イラク戦争の勃発、国内外での地震災害の多発などから、国際的な人道支援活動のあり方、大規模災害に対する医療対応、医療機関と防災機関との連携などについて、医療者を含め世間の関心が高まったため、今回の学会はこれらを網羅し、実りのあるものとなった。学会では、次世代を担う若い災害医の積極的な発言を聞くことができ、災害に強い医師が育ちつつあると感じた。また多くの看護師、パラメディック、消防関係、警察関係、自衛隊関係者のご参加をいただき、過去最高の350人の参加があった。

次年度は、阪神・淡路大震災の10周年であり、第10回日本集団災害医学会は千里救命救急センターの藤井所長が会長で、大阪の吹田市で2004年3月3～4日と行われますので、北海道医師会諸氏の積極的なご参加をお願いいたします。

最後に本学会を開催するにあたり、貴重なご助言をいただいた豊田馨北海道医師会常任理事・救急医療部長に深謝いたします。

## 文献

1. 浅井康文：災害拠点病院の重要性の認識と、集団災害における専門医のかかわり、治療学、36：956,2002
2. Asai Y., Arnold JL：Terrorism in Japan, Prehospital and Disaster Medicine,18(2),106-114,2004